



演奏とともに絵や詞章など  
視覚的に邦楽を体感する  
シリーズもいよいよ最終回。  
20回目は、「隅田八景」が  
舞台です。

## 第20回 隅田八景 ～吹けよ川風～

9/18  
金  
14:00

※公演開催についての最新情報は  
紀尾井ホールウェブサイト等で  
お知らせいたします。

### 邦楽の風景 総集編

江戸時代の風景、風物、生活等をテーマとするお話と、邦楽演奏を視覚的な要素も織り込んでお聴きいただくこのシリーズは、「深川」「吉原」「酒」から始まり、第4回に「隅田川」をテーマにお届けしました。江戸の町の東側を流れる隅田川は、江戸の人々にとって、水害や大火にたびたび見舞われた現場でありましたが、同時に生活や憩いの場としてもなくてはならない存在でした。文化の面でもとりわけ、能の「隅田川」を元として数多くの隅田川物が生み出され、芝居では、川、橋、そしてその両岸が重要な舞台となりました。そこで、まだまだ語り足りない隅田川第2弾をお贈りします。

### 黒御簾音楽で聴く、再び！

ご記憶に残っている方も多いかもかもしれません。第18回「新吉原」で大好評でした黒御簾音楽を再びご堪能いただけます。

黒御簾音楽とは、歌舞伎の舞台袖で板囲いをし、黒いすだれを下げた黒御簾で演奏される歌舞伎囃子のことで、芝居中の伴奏や効果音、また情景の描写など、さまざまな場面で活躍します。「隅田川」といえば東京の東部一帯を流れ東京湾に注ぐ川。芝居にも頻繁に出てきます。柳橋から吉原へ上って、深川へと下る川の旅を音楽に乗せてゆるりとお楽しみください。

さらに前回に続き今回も、出演者と解説者のトークセッションを予定しています。実際の歌舞伎舞台でのエピソードや歌舞伎の知識なども交えながら、芝居を彩る黒御簾音楽の豊かさを楽しく知ることができるよう。

### 清元「お染」と隅田川

お染久松は、1710(宝永7)年1月6日に大坂で油屋の娘お染と奉公人の丁稚久松が中心とした事件を劇化した作品で、人形浄瑠璃や歌舞伎の『新版歌祭文』

が有名です。その影響を受けて鶴屋南北が作った『於染久松色読販』では、設定を大坂から江戸浅草に変え、お染をはじめ七役を、看板役者の早替りで演じてみました。その歌舞伎舞踊が、清元「お染」(道行浮瑠璃)と、常盤津「お光狂乱」です。清元「お染」は、浅草の大店のひとり娘のお染が、親の決めた縁談が嫌で家を飛び出し隅田川の土手までやって来ます。それを恋仲の久松が追いかける。ちょうど居合わせた猿廻しが二人を万歳で祝うものの、当の両人は心中の覚悟を決めるといってお話です。お染久松ものが題材として長年親しまれてきたことは、この南北の作品が中心事件から一世紀以上経っていることから



歌川広重「両国柳橋」(国立国会図書館蔵)

うかがえます。舞台が大坂から江戸へ、そして隅田川となれば、当時の江戸の人はより身近な出来事として感じることできたでしょう。常盤津「お光狂乱」は、その続きになります。こちらは新たに始まるシリーズ「浮世絵で楽しむ邦楽」でお楽しみください。